通はしかければ、昔は温泉、かの柔田津ちかき邊に在しか、又はかの山間の迫門などより、潮の滿來て入江なりしか、古歌古書などの今世の地理にあひがたきも、國々にこれかれおほかれば、猶考ふべし、

〔日本書紀二十六齊明〕七年正月壬寅、御船西征、始就于海路、　庚戌、御船泊于伊豫熟田津石湯行宮、熟田津、此云爾枳陀豆、

〔釋日本紀十四述義〕伊豫國風土記曰、湯郡、○中略　天皇等於湯幸行、降坐五度也、○中略　以後岡本天皇、○齊明　近江大津宮御宇天皇、○天智　淨御原宮御宇天皇○天武　三軀爲一度、

〔萬葉集一雜歌〕後崗本宮御宇天皇代天豐財重日足姫天皇位後卽位後崗本宮

額田王歌

熟田津爾船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜、

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰、飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇大后幸于伊豫湯宮、後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征、始就于海路、庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮、天皇御覽昔日猶存之物、當時忽起感愛之情、所以因製歌詠、爲之哀傷也、卽此歌者、天皇御製焉、但額田王歌者、別有四首、

〔袖中抄十三〕なりたづ

なりたづにふなのりせんと月まてば玄ほもかなひぬいまはこぎこな

顯昭云、なりたづとは熟田津とかけり、但考日本紀に、熟田津此云爾枳陀豆、然ば萬葉にてもにぎたづと可讀歟、なりたづは伊與にある所なり、いまはこぎこなは許藝歟菜とかけり、こげこなともよめり、同事也、又柔田津ともかけり、又熟田津をむまたづともよめり、同心歟、

〔萬葉集抄三〕伊豫國風土記には、後岡本天皇御歌曰、美枳多頭爾波氐丁美禮婆云々、にとみと同